

【研究ノート】

地域レクリエーション協会の足跡と展望

ー西宮市レクリエーション活動協会の事例からー

History and Prospects of regional Recreation Associations : Forcus on Nisinomiya Recreation Activity Association

田島 栄文

Yoshifumi Tajima

〈摘 要〉

日本のレクリエーション運動（以下レク運動と表記）の推進団体である公益財団法人日本レクリエーション協会（以下レク協会と表記）が設立して 76 年が経過した。ナショナルセンターとしての日本協会の目的を果たすべく 47 都道府県には加盟団体として地域協会が設立されており、地域住民の余暇生活の充実と開発、及びレク運動の普及発展のため、それぞれが組織化し活動を行なっている。

事例研究として、都道府県レク協会の 1 つである「特定非営利活動法人兵庫県レクリエーション協会」の加盟団体である「西宮市レクリエーション活動協会」に焦点を当てる。筆者が 1987 年設立以来地域で活動してきた団体なのだが、平成から令和にかけての 18 年間の活動の足跡を振り返り、そして地域に根ざした社会貢献活動を推進する地域レク協会の今後の展望を考察する。

（キーワード） レクリエーション運動 日本レクリエーション協会
地域レクリエーション協会 学習会 地域連携 社会貢献

I. はじめに

筆者は大学生時代の 1985 年から地域のボランティア活動を継続しており、その活動の中心にある団体が地域のレク協会である。兵庫県宝塚市ー兵庫県川西市（阪神淡路大震災被災により避難生活）ー兵庫県西宮市と居住地を変えながら、地域住民の余暇生活の充実に向けたボランティア活動を地域レク協会の仲間と共に約 39 年行ってきた。

地域レク協会はピラミッド型の組織の一つである。その頂点で日本のレク運動の中心的役割を担った日本レク協会が創立して 2023 年で 76 年目となる。その前身の日本厚生協会の結

成から数えると 84 年目。アメリカで発展し、1920 年代に世界に広がったレク運動の流れを受けて、我が国では「レクリエーション」を「厚生」と訳し、戦前は「厚生運動」と呼び国民の体力づくり促進に影響を与えた時代から、レクリエーションは人々の生活の中にあった。

敗戦後、日本社会の新しい歩みと軌を一にして進んできた日本のレク運動は、常に社会の動きに対応しながらレクリエーションが人間生活に不可欠の要素であることを主張し続け⁽¹⁾、国民の余暇生活の充実と開発、及びレク運動の普及発展に資することを目的としてきた⁽²⁾。

レクリエーションが行われる場は、我々の生活領域の全般に及ぶが、日本レク協会は地域・職場・学校・社会福祉の 4 つの領域を我々の主要な場と考えて様々なレク運動を展開し、日本国民の明るく豊かな生活の形成に関わり続けてきた⁽³⁾。

このような日本レク協会の草の根運動を支えているのが、都道府県及び市区町村における地域レク協会である。1993 年に日本レク協会が「特定公益増進法人」に認定されるに伴い、都道府県レク協会はこれまでの維持会員から加盟団体という位置付けに変わり、その機能も「都道府県内におけるレク活動の統括組織」という性格付けがなされ、日本レク協会と連携を図りつつ、地域における運動を展開している。また、市区町村レク協会は、各都道府県レク協会の加盟団体又は団体会員という形態で各地域での運動推進を担っている⁽⁴⁾。

大学生時代のキャンプカウンセラーなどのボランティア活動をきっかけに地域レク協会に所属し、社会人になっても福祉施設職員や介護福祉士養成の福祉系学校の教員勤務の合間をぬって、多くの諸先輩方に導かれ、多くの地域住民と関わりながらここまで活動を行ってきた。現在は役員の立場で様々な運営に携わっている。

本稿では、都道府県レク協会の 1 つである「特定非営利活動法人兵庫県レクリエーション協会」の加盟団体「西宮市レクリエーション活動協会」に着目する。1987（昭和 62）年発足以来、今年で 37 年目となる地域協会としては老舗の団体で、地道に継続的な活動を行ってきた。1987～2005 年までの 19 年は筆者が過去の紀要で執筆しているので、その後の 2006～2023 年の 18 年間の足跡を振り返り、そして地域に根ざした社会貢献活動を推進する地域レク協会の今後の課題と可能性を考察する。

II. 日本レク協会と地域レク協会

1. 関係性と役割

はじめに公益財団法人日本レク協会の沿革を現在の HP より記す⁽⁵⁾。

「日本レク協会は、昭和 22（1947）年の創立以来、レクリエーション指導者の養成事業のみならず、レクリエーションを原動力として、市民と共に地域の活性を図る活動を多彩に繰り広げる公益財団です。

設立より、日本レク協会の総裁に三笠宮殿下（平成 28 年 10 月 27 日薨去）を奉戴し、我が

国のレクリエーション運動を統括振興しております。

平成 5（1993）年には公益性の高い財団法人に認められる特定公益増進法人として、平成 10（1998）年には、国、地方公共団体と同様に紺綬褒賞の申請団体として、総理府より認定されました。

平成 23（2011）年 4 月からは、内閣府より公益財団法人の認定を受けています」と記している。

また、2005 年度の HP では、「そして、多様なレク活動の普及と、それを楽しむための仕組み・組織づくりに、加盟団体でもある都道府県レク協会、種目・領域団体及び市区町村レク協会とともに、取り組んでいる文部科学省認可の財団です」と記載されており、平成 5（1993）年 9 月 29 日に「特定公益増進法人」の認定を受け、国から“教育または科学の振興、文化向上、社会福祉などに貢献する公益法人”として認可されている⁽⁶⁾。そして、「公益財団法人」とは、平成 20 年施行の「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」に基づき設立される法人で、自法人の利益の追求だけでなく、社会にさまざまな好影響を与えることを目的に活動する団体であり、公益財団法人の設立には、一般財団法人を設立後に公益性の審査を経て、内閣府または都道府県の行政庁の公益認定を受けることで「公益財団」として税制上の優遇措置などが受けられるようになる⁽⁷⁾。

つまり、都道府県レク協会や市区町村レク協会は、国民の健康保持増進と地域社会の活性化に役立つレクリエーション活動を、教育または科学の振興、文化向上、社会福祉などに貢献する公益事業として、日本レク協会とともに展開する団体と言える。

2005 年 4 月発行の月刊誌「レクリエーション」には、「都道府県レク協会：都道府県におけるレクリエーションセンター。レク・インストラクターの養成・選考を行い、日本レク協会が認定した有資格者が所属し、会員サービスや資格に関する支援を日本レク協会とともに行います」とある。また、「市区町村レク協会：皆さんの最も身近な組織で、活動拠点として位置づけられます。グループや個人で地域のレク活動を行っている場合には、ネットワークの結び目としての役割が期待されています。」と記されている⁽⁸⁾。

2. スローガンと事業展開

日本レク協会は現在 HP で下記スローガンと事業展開を打ち出している⁽⁹⁾。

「 *Smile for all* ～すべてはみんなの笑顔のために～

日本レク協会が目指すもの。それは、新しい社会の構築です。

人と人とのコミュニケーション、地域におけるコミュニティーづくり、子どもから高齢者までの心の健康一。

その根底にあるのが“真の笑顔”と考えます。1 人ひとりが豊かで生きがいのある生活を送れるよう、私たちは、「笑顔づくり」を応援します。

私たちは様々な活動や研修プログラムを提供し、人材と組織の育成も行っています。この30年間だけでも40万人を超える人々が公認指導者となりました。ぜひ、これらレク協会の事業をご活用ください。」

以下に示す実績は、2012（平成24）年度に日本レクリエーション協会が都道府県・市区町村レク協会を対象に行った事業調査をもとに集計したものです。

【イベント】106万人がレク協会のイベントに参加！

昨年度、都道府県レク協会、市町村レク協会の事業参加者数の総計は106万人となりました。これらの事業の中には、ニュースポーツの教室や大会、野外活動、ウォークラリー、レク大会、市民まつり・フェスティバルなどがあるほか、全国一斉「あそびの日」キャンペーンも含まれ、2,500件を超える事業が実施されました。

事業数で一番多かったのはニュースポーツ種目やウォーキング、体操などの教室や大会などで、都道府県レクリエーション協会では45%、市町村レクリエーション協会では47%となりました。参加者数では、市民まつり・フェスティバルの占める割合が一番多く、都道府県協会が67%、市町村で65%にのぼり、ニュースポーツ種目などの場合は、それぞれ22%、34%となっています。

参加対象別に事業を見ると、都道府県レクリエーション協会では、対象を絞らない事業が30%、親子・子どもが25%、中高年・高齢者が23%、一般成人が18%となり、市町村レクリエーション協会では、対象を絞らない事業が37%、親子・子どもが25%、中高年・高齢者が18%、一般成人が10%となり、誰もが参加できるタイプの事業が多いことがわかりました。事業の実施形態では、都道府県レクリエーション協会では主催が35%、受託が34%、共催・共同が2%、市町村レクリエーション協会では主催が43%、受託が32%、共催・共同が21%となっています。

【社会貢献】社会貢献活動で5万5千人を支援！

これらの活動の中には、社会貢献的な活動も数多く含まれています。東日本大震災での被災者支援では、子どもたちの遊びや身体活動の支援、高齢者の健康づくりや交流などを行い、岩手県、宮城県、福島県を中心に553回の活動が実施され、約1万3千人の被災者を支援しました。子どもたちの体力低下という社会的な問題に対応する「おやこ元気アップ！事業」も、全国101カ所で実施。11,160人の親子に、楽しみながら取り組める運動プログラムを紹介しました。

子どもたちについては、放課後に安心して遊べる居場所を提供する事業も行われ、全国で46カ所で事業が実施され、31,000人を超える子どもたちに遊び場を提供しました。このほか、高齢者の健康づくりや介護予防として、多くの市町村レクリエーション協会が健康教室や転倒予防教室、サロン活動などに組み、「ニューエルダー元気塾」や「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業」なども実施されました。

【人づくり】4万7千人が研修会を受講！

都道府県レクリエーション協会と市町村レクリエーション協会が行う講習会やセミナーは、635事業、受講者4万7千人にのぼりました。このうち、レクリエーション・インストラクター資格取得講座は、都道府県レクリエーション協会が51事業、市町村レクリエーション協会が60で事業となり、参加者の総数は3,800人にのぼります。

対象や目的を絞った講習会では、高齢者・障害者関連が一番多く、都道府県レクリエーション協会では73事業で6562人、市町村レクリエーション協会では86事業で8,758人となっています。また、子どもの居場所関連は、両方合わせて22事業で2,875人、教員関連は13事業で1,428人、保育・幼児教育関連は13事業で667人などとなっています。

【組織づくり】都道府県や市町村に地域レクリエーションを振興する組織を育成！

日本レクリエーション協会には、47都道府県レクリエーション協会やスポーツ・レクリエーション種目の普及を図る加盟スポーツ・レクリエーション種目団体や特定の種目にかかわらずレクリエーションを推進する加盟協力団体があります。

その他、市町村レクリエーション協会も全国に約500地域で設立されています。

このように日本レク協会は日本におけるレクリエーション運動を推進すべく、【イベント】【社会貢献】【人づくり】【組織づくり】の4部門における具体的事業展開を掲載している。

Ⅲ. 西宮市レクリエーション活動協会

1. 沿革

それでは、「特定非営利活動法人兵庫県レクリエーション協会」の加盟団体でもあり、発足して37年となる「西宮市レクリエーション活動協会」について紹介する。

1987（昭和62）年発足時は「西宮市レクリエーション福祉活動協会」という名称で活動開始。当時の会報「ほっとニュース」に当時の副会長今西永児氏が次のように述べている。“福祉のボランティア活動をしていく団体を作ろうと、お互いに合意したものの「西宮市」と「レクリエーション」という名前は外すわけにはいかない。また「福祉協会」という名前はどこにでもあり特色が出せない。あくまでも我々は、他の団体と異なりアクティブに活躍しなければならないので「活動」というボキャブラリーは絶対必要である。等々そしてついに「西宮市レクリエーション福祉活動協会」という長い長い名前に落ち着いたのです。”

1988年に西宮市内の障がい福祉サービスを営む社会福祉法人に就職した筆者にとって、毎月第4火曜日の夜に職場近くの公民館で行われる月例会（学習会）はとても楽しみで、レクリエーションと福祉のことを繋げて考えられるこの協会に知らず知らず惹きつけられたことを覚えている。

1990年代福祉レクリエーション推進の流れを受け、「全国福祉レクリエーション・ネットワーク」県支部のような位置付けの「福祉レクリエーション・ネットワーク兵庫（現在はひょうご福祉レクリエーション・ネットワーク）」を西宮で発足するに伴い、「西宮市レクリエーション活動協会」と1998年名称変更をし、現在に至っている。

この会の目的は「市民をはじめ全ての人（以下市民等と略）の生活が豊かで幸せな生活となるよう、レクリエーション活動を通じて、会員相互の資質の向上と親睦を図りながら、一人ひとりが健康で住みよい福祉社会を築くこと」とし、“西宮市内を主たる活動拠点とし、福祉的な視点（人々の幸せづくり）をもって、様々な県民レクサービス事業をボランティア精神で展開していく”方針で、会員みんなで協力しレクリエーション実践活動を通じて普及振興啓発に励んでいる。

2. 組織と会員と財政

発足に当たって会長以下副会長、理事長、理事、事務局、会計、監査、顧問等役員と一般的な組織をつくったが、実際協会の屋台骨を支える活動は、他地域のレクリエーション協会と同じく、地域の公認指導者（特に主婦層の女性）がボランティアで汗をかきながら手弁当で草の根運動体として支え合って頑張ってきた団体である。1998年名称変更の頃より役員体制を運営委員中心の制度に変更し、会長、事務局長、会計、運営委員、監事とシンプルにしている。事務局機能も有志の個人宅（37年間で5ヶ所）に置き、その家庭・家族の理解の上で成り立っている。西宮市ボランティアセンターに登録しているボランティア活動団体でもある。

会員数は、平成初期には研修案内郵送者が200名超であった。現存資料の中では2008年総会資料で57名という記録があるが、この辺りをピークに年会費（1200円）を納める会員は減っている。2022年度末で会員数は24名である。基本的にはボランティア団体なので、近年若者の福祉ボランティア離れの傾向からか20～30代の若者世代の会員が拡がらない。

次に財政面だが、20周年の1996年度には40万円の繰越金や日本レク協会から委託の講習会開催等で200万円規模の決算報告の時期があった。阪神・淡路大震災復興支援のレクボランティア活動助成などもあった。その後は40～60万円の範囲の予算規模で推移しており、2022年度決算総額は約49.8万円、内繰越金は21.2万円だった⁽¹⁰⁾。

3. 事業

(1) 西宮福祉レクリエーション学習会

さて、肝心の事業については、設立より力を入れている「人材育成研修（人づくり）」と「現場実践活動」（社会貢献活動）の2部門は継続して取り組んでいる。（後述 表2・表3）

本報告では、「人材育成研修」（人づくり）事業の一環で、協会設立20周年を迎えた2006年度に新年1月より新たにチャレンジし、17年継続できている点に注目した。

2007年1月より毎月1回（当初は第4水曜日19時から2時間）、地域のハブステーションである阪急西宮北口駅下車すぐの西宮市大学交流センターで「西宮福祉レクリエーション学習会」を開始した（コロナ禍以降時間短縮し、現在は第4火曜日19時から1時間半で開催）。

ちょうど介護福祉士養成課程の見直しに伴い、「レクリエーション活動援助法」が無くなっていいのかという議論が出てきた時期でレク協会として危機感を感じ、当時の福祉現場に対し私たちが出来ることを議論し、そのキーワードとして「地域に根ざした実践活動を継続すること」「現場の声を受け止めること」と考えた。著名な講師を招いた高価な研修会、講師から受講生への一方向の講習ではなく、安価で相互交流の勉強会&気軽な情報交換や悩み相談の場をつくろうと20年ぶりに復活した学習会であった。原点に帰った草の根活動から再スタートを切る思いで、まずは会員を中心にDMや県レク協会HP等で呼びかけたところ、平日夜の時間帯にも関わらず、地元の阪神地域はもちろん、西は明石市、東は大阪府寝屋川市からと広範囲の参加と、予想外に反響があった。それから17年で195回の学習会を重ね、延べ2200名を超える参加者があったのである。（下記表1参照）

表1 西宮福祉レク学習会の年度別実績

年目	年度	学習会回数	延べ人数	月平均人数
1	2006 平成 18	3	53	17.7
2	2007 平成 19	12	230	19.2
3	2008 平成 20	12	記録なし	
4	2009 平成 21	12	記録なし	
5	2010 平成 22	12	記録なし	
6	2011 平成 23	12	261	21.8
7	2012 平成 24	12	261	21.8
8	2013 平成 25	12	182	15.2
9	2014 平成 26	12	166	13.8
10	2015 平成 27	12	206	17.2
11	2016 平成 28	12	133	11.1
12	2017 平成 29	12	139	11.6
13	2018 平成 30	12	143	11.9
14	2019 令和元	11	142	12.9
15	2020 令和2	10	87	8.7
16	2021 令和3	9	65+o10	8.3
17	2022 令和4	10	69+o18	8.7
18	2023 令和5	8	44	5.5
	計	195回	2209名	13.9名

*2023年度は12月末日現在 *oはオンライン参加

開始3年目に2008年6月発行の月刊誌「レクリエーションNo.589」でも取材掲載（ルポ：レクリエーション最前線「現場の声をぶつけ合い、互いに成長し合える学習会」）⁽¹¹⁾され、当時周囲から様々な反響があったことを覚えている。内容は、参加者が自主的に持ち寄り発表するレク実技体験学習あり、福祉&レク関連の講演や講習会等に参加した方からの報告・情報あり、自己紹介&近況報告の交流タイムあり、…と参加費200円で毎回様々な内容で、もちろん集団型レクばかりでなく、小集団あるいは個人へのレク援助も大いに意識している。

コロナ禍の約3年間は開催が危ぶまれたが、使用会場が使用禁止とならない限り、数人でも参加者があれば感染対策を取りながら継続するという強い決意をもって、数回中止はあったが、なんとかコロナ禍を乗り越えた。しかし、コロナ禍明けの参加者数は以前より少なくなっている現状だ。

(2) 人材育成研修（人づくり）としての「日曜祝日の1日研修会」

地域レク協会は社会人が会員の大多数であるため、土曜・日曜・祝日の活動が多くなる。当協会のメイン事業である「人材育成研修」（人づくり）と「現場実践活動」（社会貢献活動）も多くは日曜・祝日に実施している。

はじめに、「人材育成研修」（人づくり）事業である。前項で平日の定例学習会を増やし強化したが、原則年3回（春・秋・冬）の日曜か祝日に、会員ニーズを踏まえ運営委員会でテーマを検討し、主に外部からの特別講師を招いて企画し、募集要項を自前で作成し、郵送・FAX・メール送信・SNS・口コミ等で広報PRし、参加者を募っている。

総会資料に参加人数を正確に記載するようになってからのデータを年度別にまとめた。（下記表2参照）

表2 日曜祝日の1日研修会の年度別実績

年度	研修会回数	延べ人数	1回平均人数
2011 平成23	2	65	32.5
2012 平成24	3	86	28.7
2013 平成25	3	90	30
2014 平成26	3	77	25.6
2015 平成27	3	127	42.3
2016 平成28	3	106	35.3
2017 平成29	3	87	29
2018 平成30	3	114	38
2019 令和元	2	78	39

2020 令和 2	1	20	20
2021 令和 3	0	0	0
2022 令和 4	3	61	20.3
2023 令和 5	2	48	24
計	31 回	959 名	30.9 名

*2023 年度は 12 月末日現在

コロナ禍前までは、1 回あたり 25～40 人程度の参加者があったが、コロナ後に落ち込んでいる。

内容としては、福祉分野におけるレク支援の考え方やその支援技術・実技体験である。対象別には高齢者（介護予防、認知症予防）向けや障害者・児向けであったり、活動種目別にはコミュニケーションゲーム系、歌・音楽遊び系、ダンス・体操・運動遊び系、バラスポーツ・アレンジスポーツ系、工作（クラフト）、写真、等をテーマにしたり、その他セラピューティックレクやコロナ禍中の笑顔の大切さ、といった多種多様なテーマで研修会を開催してきた。

昭和 60 年代～平成 10 年頃までは、主に会員や過去の参加者に募集要項を郵送するだけで多くの参加者が集まっていたが、だんだん個人情報の取扱いが厳しくなり郵送よりも情報のメール配信を望む方も増えたり、会員に福祉職員が多いため勤務予定確定のためより早い情報発信が求められる等広報の方法も多様化しているので、ボランティア型の団体組織では事務局対応が大変になってきている。

(3) 現場実践活動（社会貢献活動）としての「レク・ボランティア活動」

次に、「現場実践活動」（社会貢献活動）だが、公認レクリエーション指導者資格を持つ多くの会員は学んだレク支援技術を活かしたいという気持ちはあるが仕事の事情等で実際はなかなか活動できていないというのが実情である。当協会としては事務局や運営委員にボランティアの依頼があれば日時・場所・内容を会員に流し希望者を募って段取りをつけるようにしているが、前述のように会員に福祉職員が多いため人手不足などの福祉業界の抱える課題は個人の自由な余暇時間の活用には至っていないようだ。

昭和 60 年代～平成 10 年頃までは、当協会独自で高齢者向け・障がい者向け・子ども向けのレクリエーションイベントを企画し実施するなど積極的な福祉レク支援も行っていった。近年は固定した依頼に固定したメンバーで支援したり、新規の依頼があったら何とか人と日程を調整してやりくりし、レクリエーションによる社会貢献活動を継続している。

総会資料にボランティア活動（内容・対象・人数等）記録を正確に記載するようになってからのデータを年度別にまとめた。（下記表 3 参照）

表3 レク・ボランティア活動の年度別実績

年度	ボラ活動回数	内介護予防 事業	内障害福祉 事業	内一般県民 対象事業
2011 平成 23	21	13	6	2
2012 平成 24	15	7	6	2
2013 平成 25	13	8	5	0
2014 平成 26	17	7	8	2
2015 平成 27	18	10	8	0
2016 平成 28	13	4	9	0
2017 平成 29	14	4	10	0
2018 平成 30	14	4	9	1
2019 令和元	15	4	8	3
2020 令和 2	8	0	7	1
2021 令和 3	8	0	7	1
2022 令和 4	14	2	12	0
2023 令和 5	9	1	7	1
計	179 回	64 回	102 回	13 回
割合		35.8%	57.0%	7.2%

*2023 年度は 12 月末日現在

こちら、コロナ禍で大きく減少した。特に市の介護予防事業に関する依頼が減ったままである。新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが 2023 年 5 月 8 日から季節性インフルエンザ等と同じ 5 類に移行し収束に向かってはいるが終息とはならず、高齢者を集める公的事業の復活・拡大には行政が慎重になっているように思える。

IV. 今後の展望～地域レク協会が地域社会（福祉現場）に貢献していくには

ここまで筆者の関わる西宮市レクリエーション活動協会の 37 年の歴史の後半約 18 年の足跡を振り返ってきた。本章では、このようなボランティア型の地域レク協会が今後地域社会に貢献していくための展望を考察する。

現存するアンケートデータより新旧のものを抜粋し、当協会事業での会員（含運営委員）

や新たな参加者の声（下線は筆者）をピックアップすると少し方向性が見えてきた。

【2007年1月 福祉レク学習会の1回目】

<参加理由>

○職場でレクが必要なので勉強し引き出しを多くしたいと思った（50代・女性）○仕事上レクに関する技法・話術・指導、あらゆる事に対して学習していきたいと思った（50代・女性）○人とのコミュニケーションをとる手段としてとても興味があったので参加した。消極的な自分から自分自身も変わればいいのかと思う（50代・女性）○今の自分の力不足を何とか補充して利用者の方にもっと「生きがい」を感じてもらいたい（20代・男性）○昨年から介護予防の仕事も始まりレクの大切さを痛感している（40代・女性）○月2回手伝っている在宅老所の雰囲気が少しでも明るくなればと思って。半分はどんな勉強会なのか知りたいと思って（60代・女性）○何か活動のきっかけになればと思い参加した（30代・女性）○レクインストラクターから福祉レクワーカーの資格も取りたいから（40代・男性）○情報を得たい、ネットワークを得たい、理論の構築をしたい（40代・女性）

<参加後の感想>

○早速色々学べました。自分も発信できるようアンテナを伸ばしていきたい。みんなで作り上げていく会を目指して積極的に前進していきたい（50代・女性）○とても雰囲気が良かった。次回も参加したい（50代・女性）○今回参加してとても関心を持ちました（50代・女性）○生の人の声を聴き勉強できる喜びに幸せを感じた。次回も必ず！（20代・男性）○あつという間の2時間、今までやってきた同じようなレク財でも言葉かけや隊形が違ふとまた発展した楽しいプログラムになり大変勉強になった（40代・女性）○GSD（ゲーム・ソング・ダンス）だけでなくクラフト等で高齢者が作る楽しみ（喜び）を思い出せるようなものも学びたい（30代・女性）○経験者も多くてとても学ぶことの多い会だった。初めてだったが楽しかった（60代・女性）○急がずポチポチやっていくのがいいと思う。ただし参加者個々のニーズはきちんとくみ上げて（40代・女性）○なごやか、さわやか、気楽（高齢者に最適ですね）（70代・女性）

【2023年7月 日曜研修会】

<参加後の感想>

○レクの本質を教えていただいたような気がする。何も道具がなくてもこんなに楽しく密なコミュニケーションがとれる。もっともっと学ばないといけない、意欲が出た（70代・女性）○今までのレク財もありながらそれをもっとアレンジしていくことで新しいレク財として作り上げていくこと、これからの私の課題（70代・女性）○M先生の心くぼりの指導方法を丁寧に教わって、楽しいこと！久しぶりに向上心とレクの素晴らしさを体験した。笑顔が出るとこんなにも心が弾み、若返りできた〜と感謝！（70代・女性）○子ども・教育現場のコミュニケーションを育むためのツールとしてもっともっと活用すべきだと再認識した。私たち

の脳トレにもなった (70代・女性) ○コロナに悩まされこんなに楽しいレクタイムはずっと忘れていたように思う。笑い合うって素敵、でもすごいエネルギー使いました (70代・女性)
○いつの時代でも楽しむ・楽しんでもらいたいという気持ちは一緒だと思った (60代・女性)
○M先生のレクはやはり最高！昔のレク財でもその進め方、声のかけ方が素晴らしい。レクは対象者によって変化させながら誰もが楽しめる。明日から現場で活用する (60代・女性)
○心、アイデアがひらめくチャンスとなる内容で、何より自分のために大切な時間となった (60代・女性) ○毎回楽しく内容も工夫され、アレンジでこれだけ変化するんだと学びがあった (40代・男性) ○「失敗こそヒーロー」の言葉にもレクの極意が詰まっていると思う (40代・女性)

<今後学びたい内容>

○音楽を使ったり今流行っている曲の歌体操 (60代・女性) ○高齢者が楽しめるゲームや物を使わないゲーム等 (50代・女性) ○介護予防体操レク (60代・女性) ○レク大会で使える競技種目等 (60代・女性) ○レクの講義も学びたい (50代・男性) ○体を使った活動、音楽レク、体操や空き時間道具無しで出来るレク活動、レク理論→福祉現場の方や福祉系学生に聞いてもらいたい (40代・男性) ○個別に出来るレク、介護情報を教えて (年・性別未記入)
○何でも学びになる (70代・女性) ○昔からあるのに現在は取り上げられてないレク財の掘り起こし (70代・女性) ○再度M先生の研修 (70代女性複数名)

当協会会員及び研修会参加者には、当たり前だが多様な参加ニーズがある。レクとの関わりにも濃淡がある。仕事・業務でレクを行なっている者から地域等のボランティアでレクを活かしている者、自分の心の元気づくりのために参加している者、…等々いる。そのため人材育成研修 (人づくり) 事業については、テーマを出来るだけ多種多様なものにして幅広く受け入れる体制が必要だ。その意味でも、設立20年目頃の団体の沈滞化・マンネリ化した空気を、年3回の日曜祝日の1日研修会に加え、年12回の平日夜の学習会を増やしたことで活性化につながった大きな成果と思っている。比較的少人数の学習会で参加者相互の密なコミュニケーションから会員ニーズを収集・分析し、一日研修会で広範囲から多くの参加者動員に繋げるという好循環がコロナ禍前までは出来ていた。

受講 (参加) 後の声から、レク実技演習を通した「楽しい」体験が次回への参加「意欲」をもたらし、複数回の参加が相互の「コミュニケーション」を深め、当協会への「積極的」な関わり・向上心へと変わっていく傾向が見られやすい、のが地域レク協会の特徴だ。

また、そのような会員の気持ちを更に引き上げていくためにも「現場実践活動」(社会貢献活動) の機会を提供することは必要不可欠だと感じている。レクを求めている地域や福祉現場等で学んだことを実践し、対象者が「笑顔や元気」を取り戻し、感謝される「成功体験」は、また頑張ろうという「意欲」と自身のレク支援技術のレベルアップ等の更なる「向上心」へと導けると考える。

しかし、課題も多い。コロナ禍後の地域や福祉現場では人々が集まり交流する機会が激減してしまった。行事・イベントも3年間無くなると、復活のハードルが高くなっている。同じような規模で行なうのにためらいがあったり、主催者（行う側）のやるぞという熱量も必要だがそのエネルギーが足りない。地域レク協会のような支援できる技術や人材を持つ団体が積極的な働きかけを行い、他団体との連携による開催などを模索していく必要がある。

また、ボランティアで動く人材もコロナ禍後は減っている。20年前40代～50代だった会員が60代～70代でまだ中心的存在だ。青年～壮年層がなかなか増えない。役員・運営委員も高齢化している。学習会・研修会等による人材育成の在り方も現状維持ではなく、新たな視点による創意工夫をして魅力的な人材開発をしていくことが求められている。そのキーワードは「人と人の笑顔のコミュニケーションの仕掛け」「地域の中の繋がり・連携の活用」ではないかと考えている。

一事例だが、筆者が20代に勤務していた西宮市の社会福祉法人の障がい福祉事業所から最近相談があり、50～60代の生活介護サービスの重度の利用者を対象に、健康づくりを目的としたレクリエーション支援を依頼され、2023年11月より10:00～11:30の90分間のプログラムを月2回行うようになった。三十数年前に職員として関わっていた利用者も多いため障がいの特性や個性がわかっているため、コミュニケーションが取りやすく、障がいのある方にも楽しみながら身体を動かす良い時間になっている。利用者と家族・職員から好評である。他にも筆者が関わる愛知県尾張旭市や兵庫県宝塚市・姫路市の団体からも障がいのある方の余暇活動の場づくりの相談も増えてきている。このような機会を地域レク協会の福祉現場実践活動の一環として会員（含レク指導者資格保持者）に知らせ協力してもらえたらと思う。そして、地域の中で身体と心の元気づくりの場・楽しい余暇活動の選択肢を増やす場としての地域貢献が増えると、地域レク協会の必要性もより増していくのではないかと考える。

IV. おわりに

筆者の三十数年にわたる兵庫県での地域実践の取組みを「西宮市レクリエーション活動協会」という団体の活動を振り返りながらここまで見てきた。

3年前に本学に赴任し愛知県尾張旭市をはじめとする近隣地域との関わりを介護福祉教育に活かしたいと思い、積極的に地域へ出ていき繋がりを見つけ、福祉専門職を目指す学生たちの人材育成方法の工夫や現場実践活動の場の開拓に尽力してきた。人脈も少しずつ拡大している。短大との連携協定を結ぶパラスポーツ団体も出来た。地域との連携を大切に取組んできた地域レク協会というボランティア型の団体運営でのこれまでの経験が大いに活かされていることを感じる。

幸い本学では介護福祉士にプラスして福祉レクリエーション・ワーカーやレクリエーション

ン・インストラクター、初級パラスポーツ指導員資格を取得する卒業生たちがいる。その貴重な人材を卒業後も活かせるよう、「特定非営利活動法人愛知県レクリエーション協会」とも連携し、この尾張旭市を拠点とする、地域へのレクリエーション支援を実践しフォローアップを図る団体を創るお手伝いが出来れば…と考えている。そのためにも今以上に地域との繋がりを拡げ密にし、より積極的に取り組んでいきたい。

【注】

- (1) 日本レクリエーション協会編「レクリエーション運動の五十年」日本レクリエーション協会、1998年、p. 288
- (2) 同上、 p. 293
- (3) 同上、 p. 288
- (4) 同上、 p. 77
- (5) <https://recreation.or.jp/association/transition/> 日本レクリエーション協会>協会案内>あゆみと沿革、2024年1月6日
- (6) <http://www.recreation.or.jp> 日本レクリエーション協会 2006年2月
- (7) <https://jp.indeed.com/career-advice/career-development/what-is-public-interest-incorporated-foundation#%E5%85%AC%E7%9B%8A%E8%B2%A1%E5%9B%A3%E6%B3%95%E4%BA%BA%E3%81%A8%E3%81%AF> 公益財団法人とは？ 2024年1月6日
- (8) 「月刊レクリエーション No. 554」日本レクリエーション協会発行、2005年、p. 17
- (9) <https://recreation.or.jp/association/smile/> 日本レクリエーション協会>協会案内>スローガン 2024年1月6日
- (10) 西宮市レクリエーション活動協会 2006～2023年度総会資料
- (11) 「月刊レクリエーション No. 589」日本レクリエーション協会発行、2008年、p. 20-22